

樺太アイヌの「トゥイタハ」に見出される交差対句

大喜多 紀明

キーワード

樺太アイヌ 口頭文芸 トウイタハ 交差対句

1. はじめに

かつてアイヌ語には、北海道方言（北海道アイヌ語）・樺太方言（樺太アイヌ語）・千島方言（千島アイヌ語）があった。しかし、千島アイヌ語は既に絶滅言語となっている（村崎 1963: 657-661）。また、樺太アイヌ語は、かつて南樺太において使われていた樺太アイヌの人たちによるアイヌ語の「方言」であるのだが、樺太アイヌ語の「最後の話者」とされる浅井タケ氏（1902-1994）（以下、敬称略）の死によって絶滅言語になったとされている。

アイヌ文化は無文字文化であるので、アイヌ民族自身の手による筆録資料は近代のものを除くと基本的に存在しない。アイヌの伝承形態の一つは口頭による文芸である。彼らは潤沢な口頭文芸を伝承してきた。北海道アイヌにおいては、比較的多くの口頭文芸資料が採録されており、既に文献化された資料数も多いのだが、樺太アイヌや千島アイヌの口頭資料は北海道アイヌのそれに比べ、資料の絶対量が遥かに少ない。

樺太アイヌの居住範囲は、かつては南樺太地域であったとされる。居住範囲のみをみると、樺太アイヌは北海道アイヌに比べ、いわゆる「和人」の文化圏から遠く、むしろ、北もしくは中央樺太に居住したニヴフやウィルタ（丹菊 2011: 129-143）と隣接していた。北海道アイヌと樺太アイヌ、北方諸民族との文化的な関わりについての研究には、例えば埋葬形態を比較する視点による考察（内山 2006: 32-51）や言語学的視座からの考察（知里 1973）などがある。筆者は、樺太アイヌと北海道アイヌとの、口承における修辞構造的類似性について調査している。本稿では、樺太アイヌにおける口頭文芸である「トゥイタハ²」の表現法を調査し、そこで導出された修辞構造である交差対句を、筆者が以前紹介した北海道アイヌの口承における交差対句と比較した。

¹ アイヌ民族自身（北海道アイヌ）が文書として口承資料を記録した事例としては、『アイヌ神謡集』（知里 1978）や、いわゆる「金成マツノート」（一部は『アイヌ叙事詩 ユーカラ集』1～9巻（金成著、金田一訳・注 1964）として刊行されている）などが知られている。

² アイヌ語にはそもそも文字がない。アイヌ語を文字表記する上で、ローマ字による表記を行う場合もあるが、本稿では便宜上カタカナによる表記を用いた。なお、閉音節についてはカタカナによる小文字で表記した。

「トゥイタハ」は、樺太アイヌに伝承されてきた口頭文芸（知里 1948: 328-338）におけるジャンルの一つである。本稿では、村崎が浅井から採録・編集した『浅井タケ昔話全集 I, II』（村崎 2009）に掲載された「トゥイタハ」である「さらわれた娘 - 84 (*haciko monimahpo* - 84)」、「箱流しの話 (*haku monka tuytah* - 88)」、「フンドシをとられた話 (*tepa tuytah*)」、「さらわれた娘 - 88 (*haciko monimahpo* - 88)」をテキストとし、それらの表現様式を、修辞論的な視座から検討した。その結果、3編の「トゥイタハ」には、交差対句と解釈できる構造を見出すことができたが、その一方で、1編には交差対句を見出すことができなかった。

ところで、交差対句の存在については、本稿がテキストとした浅井の「トゥイタハ」を収録した村崎によるものを含め、従来の樺太アイヌの口承についての研究では指摘されてこなかった。一方、北海道アイヌにおいては、交差対句を主軸的な修辞技法として用いられていると解釈できる口承の事例が、筆者によって既に報告されている。本稿の知見は、北海道・樺太両アイヌの口承の表現法において、交差対句を主軸的な修辞技法とするものが存在するという点が共通することを示す事例である。本稿では、こうした事例として提示できる資料を紹介するとともに若干の考察を加えている。

2. 先行研究と本稿の前提

北海道アイヌ語についての言語学的もしくは文法論的な視座からの研究は、金田一や知里ら（金田一 1936）から始まり、現在に至るまで多くの人たちによってなされてきた（e.g., 佐藤 2008; 中川 2001: 1-18; 影山 1993 など）。また、樺太アイヌ語の文法（村崎 1979）や語彙（村崎 1998）については村崎による論考がある。しかし一方では、アイヌ語に対する統語論的・構造論的な視点からの研究は、文法論的な研究に較べると少ない。

筆者は、北海道アイヌの口頭文芸に散見される、構造レベルでの修辞表現法を現在まで調査してきた。とりわけ、交差対句を主要な修辞技法としていると解釈した論考としては、例えばカムイ・ユカラについては大喜多（2011）、ウウェペケレについては大喜多（2012）がある。しかしながら、樺太アイヌの口頭文芸における交差対句の存在を指摘した論文は現在まで示されていない。

そこで本稿では、はじめに、筆者の以前の調査（大喜多 2012: 181-213）によって得られた北海道アイヌでの交差対句を第3節で示し、その後、樺太アイヌの口頭文芸の場合における交差対句の事例を第5～7節で紹介した。一方で、第8節には、交差対句を見出すことができない事例を提示している。樺太アイヌの口承に確認される交差対句形式の事例を報告した論文としては、本稿がはじめてである。

さて、交差対句は、構文に施される修辞技法の一つである。本稿では、例えば $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow C' \rightarrow B' \rightarrow A'$ のように、複数の「語」・「句」・「節」が対をつくり、それぞれの対が「同心円状」に配列される構文の形式を「交差対句」としている。なお、「交差対句」の別の呼び名には「キアスムス」や「交錯配向法」などがあるが、本稿では便宜上「交差対句」という呼称を用いた。また、交差対句を構築するときの対を、本稿では「対応」という言葉で表現した。それぞれの「対応」は、全く同じ「語句」同士によってつくられる場合もあるが、意味が類似した「語句」同士で「対応」をつくる場合や、逆に、正反対の意味の「語

句」同士による場合もある。以上が、本稿で使われる「交差対句」と「対応」についての、用語としての規定である。

ところで、交差対句における「対応」が構築されるか否かの判断については、判断者の解釈の視点や判断の基準によって異なる場合がある。言い換えれば、一連の「対応」によって構成される「交差対句」には解釈の相違による曖昧さが内包するという課題を看過することはできない。このことは、本稿における方法論上の課題である。こうした方法論上の課題点の存在をここであらかじめ提示し、本稿の前提として確認しておきたい。

3. 北海道アイヌの口承における事例

本節では、北海道アイヌの口頭文芸の一ジャンルであるウウエペケレの中でも、「パナンペとペナンペがいました」に確認できる交差対句の事例を紹介する³。この資料は、大喜多(2012)で紹介したものである。なお、大喜多(2012)で交差対句を抽出する際に引用元とした文献「パナンペとペナンペがいました」(田村 1988a: 4-11)は、田村が1957年10月24日に貝沢ちきから採録した記録資料である。また、下記の引用文には筆者による下線と記号が付されている。

A パナンペ(川下男)とペナンペ(川上男)がいました。B 人間を見たこともない彼らは、C ふたりだけで暮らしていました。そして D 鹿でも熊でもとって家に運んで来て、何を食いたいとも 何を欲しいとも、思わないほど、何不自由なく暮らしていました。けれども、ふたりは熊の頭や鹿の頭をどう扱っていいのかわからないものですから、あちこちに熊や鹿を殺しても、E その頭をめちゃくちゃに捨ててばかりいたのでした。ところが、ある時、F 舟に乗って、それから、海を渡ってどこかへ行き、ふたりして舟に乗って、しばらく行って、どこかに行くと、天を突いてそびえている大きな山がありました。

そして、山のふもとの、砂原のある所に舟を揚げて、その天を突いてそびえている大きな山に登って行きました。

すると、きれいな長いカヤ原がありました。カヤ原の西のはずれに金の家、大きな家があり、そこに登って行って、こんな光景を目にしました。

家の東側に、G 天にとどくような大きなトド松が、二本立っていました。そしてそのトド松の上に、一本のトド松の上に、黄金の小鳥が木の中ほどまで下りたり上ったりしていました。そしてまた、もう一本のトド松のところ、銀の小鳥が木の中ほどまで下りたり上ったり下りたり上ったりしている様子が見えました。ふたりはそれを見て感心していました。すると、「だれも出迎える人もいませんから、お入りなさい！」という声がしました。

ですから、H たいへん、かしこまって、戸のごく下の方を開けて入りました。すると

³ 本節で引用した「パナンペとペナンペがいました」には表現における揺らぎや句読点の脱落が散見されるのだが、ここでは、引用元の文献(田村 1988a: 4-11)に記載されている文章をそのまま採用し、「揺らぎ」や「脱落」箇所についての修正は行っていない。但し、句読点については、引用元では「、」であったものを、本稿では「、。」に変換している。

神様と見まがうばかりの立派な老人がいました。その下座には神様のような立派な老女がいて、上座下座に並んで座っていました。その向かい側に若い女性がひとりいました。

そしてふたりはそこに入って行きました。そして、かしこまっていたところ、

I「お前たちはだれによこされて来たのでもないそれはこういうわけなのだ。鹿の頭や熊の頭を、お前たちはたくさんとっているが、鹿は神のようなものだが、鹿の頭や熊の頭を、お前たちはやたらに捨てている。そのことでお前たちをとがめて、それで、お前たちをここへよこしたわけなのだ。私は海の神だ。そしてこのようにお前たちがするのを見て、お前たちをとがめるために、お前たちを来させ、私のもとへよこしたわけなのだから、これからは、ユクサパウンニというもの、それからカムイサパウンニというものを作って、（祭壇を作って）祭壇というものを作って、そこに、ユクサパウンニとカムイサパウンニを作って、そこに、鹿の頭も熊の頭もせ、木幣を作って（祭る）ならば、お前たちはよいものになる。そうしなければ罰せられるためにお前たちは来た、お前たちを私のもとへよこしたというわけで、お前たちは来たのだよ。お前たちはそうするか、どうだ？」と、その神様のようなお方、老人が言いました。

I「そこで、パナンペとペナンペはこう考えました。

「とがめを受けるより、言うとおりにしたほうがよさそうだ！」と考えて、

「その、ユクサパウンニとカムイサパウンニの作り方を教えて下さったらそのようにしますから」とパナンペとペナンペが言いました。すると、「こういうふうに、こういうふうにして作るのだ。祭壇もこういうふうに、こういうふうにして作るものだよ。お前たちもこのようにするんだよ」と、その老人が言いました。

H「それからそのようにすることを承諾して、ふたりは外へ出ました。

すると、あとから、外へ出たふたりのあとから、その神様のような老人が、こう言いました。

「G「ここに、外にいる小鳥を一羽ずつお前たちにやろう。黄金の鳥を一羽、銀の小鳥を一羽、二羽お前たちにやるから、大切に持って村へ帰るのだよ。そして一緒に暮らすのだよ。

村へ帰れば鳥たちは、だんだんに美しい女の人になって、お前たちはその女たちと一緒に暮らすようになるのだよ。そうすれば、人間がふえるいわれ、人間がふえる元になって、これから人間の系統が広がる元になるのだから、そのようにするのだよ」

と（いう声が聞こえました）その神様のような老人が言いました。そして、それからふたりは、その、黄金の小鳥を一羽、銀の小鳥を一羽ずつ取って、持って、F「今度さっきの、舟のところへ下りて行って、舟を漕いで、そのパナンペとペナンペの家に戻って来ました。

そうしたらすぐに、それこそ神様のようなふたりの若い女性になって、今度私たちはそれぞれ妻にめとって、そうして暮らしているうちに、その女性たちに子供が生まれました。

それから私たちは E「鹿でも熊でもとって家に運んで来て、言いつけられたことですから、祭壇というものも作り、ユクサパウンニも作り、カムイサパウンニも作って、そのための祭壇を作って、そこに置きました。

D「それからというものは、どういうわけだか、私たちは前にも後にも、獲物が天からおろされるように、どんとどんとれる人になって暮らしている間に、C「その若いふたりの女性をそれぞれ妻にめとって、それから子供が沢山できて、それがもとになって、B「人間がふえて系統が広がったわけ、起源なのですから、話して聞かせましたと A「パナンペとペナンペが言いました」というお話よ。

このテキストの下線・記号を配列した図式は以下のとおりである。

- A パナンペとペナンペの紹介
- B 人間を見たこともないパナンペとペナンペ
- C ふたりだけで暮らしていた
- D 何不自由なく暮らしていた
- E 祭壇のない生活
- F 舟で移動
- G 金と銀の小鳥
- H 「海の神」の家に入る
- I 祭壇等を作る必要性を「海の神」が伝える
- I' 祭壇等を作ることを承諾
- H' 「海の神」の家を出る
- G' 金と銀の小鳥
- F' 舟で家に戻る
- E' 祭壇のある生活
- D' 豊かな生活
- C' 家庭ができる
- B' 人間が増える
- A' パナンペとペナンペが言いました

このような交差対句は、北海道アイヌの口頭文芸においてしばしば見出される修辞表現上の特徴の一つである。また、こうした交差対句が見出される事例はこの「パナンペとペナンペが言いました」のみではない(大喜多 2011: 24-32、2012: 181-213)。

4. テキストについて

樺太アイヌの口承テキストは、北海道アイヌのそれに比べて資料数が少ない。現存する音声採録資料には、古くは、1902～1903年に録音された、ブロニスワフ・ピウスツキによる蠟管記録(ピウスツキ総合科研 言語・音楽班 1987: 207-266)や1951年に収録された伴野によるもの(伴野 1991)などがあるが、ピウスツキ蠟管記録は保存状態が悪く、伴野(1991)は量が少ない。近年では、藤山ハル氏(1900-1974)を話者とする資料(村崎 2010)や浅井タケを話者とするものがある(村崎 2009)。浅井の口承を採録・編集した村崎は、「樺太アイヌの口承文芸は、根源的には北海道アイヌのそれと共通であるが、そのジャンル、

語り方、歌い方、形式などの特徴については、北海道の場合とかなり異なっている点が多くある。この相違点については、これまでほとんど明らかにされていなかったが、浅井タケさんの膨大な音声資料と情報によってその姿がかなり明らかになった」(村崎 2009)と書いているように、『浅井タケ昔話全集 I, II』(村崎 2009)に収録された浅井の音声資料は、樺太アイヌの音声資料としては比較的まとまった分量(54編)があり、かつ、記録状態が比較的良好である。本稿は、村崎(2009)に収録された4編の「トゥイタハ」をテキストとしている⁴。

樺太アイヌの口承文芸の「物語」に該当するジャンルには、韻文形式のものと散文形式のものがある。さらに、散文による「物語」のジャンルには「トゥイタハ」と「ウチャシクマ」⁵(村崎 2010)があるとされる。「トゥイタハ」の主な特徴を、村崎は次のように列挙している(①～④)。

「トゥイタハ」の主な特徴

- ①物語の形式が整っている。
- ②物語の内容も類型化できる。
- ③挿入歌(丹菊 2001: 69-90)があつて描写が生き生きしている。
- ④人肉を食うオヤシ⁶が登場する。

因みに、北海道アイヌにおける散文形式の「物語」は「ウウエペケレ⁷」と呼ばれる。例えば「ウウエペケレ」には、「トゥイタハ」にあるような挿入歌が存在しないなど、同じ「散文形式」の口頭文芸であったとしても、異なる特徴がある。

ところで、村崎(2009)には合計54編の浅井による「トゥイタハ」の樺太アイヌ語音声資料と、それらの音声資料を字起こした文字資料が掲載されている。また、ここでの文字資料には、樺太アイヌ語をローマ字表記したものと日本語訳とが記載されている。その中でも、本稿では、村崎による日本語訳資料をテキストとしている。

ここで、アイヌ語(北海道・樺太両アイヌ)と日本語は、基本的に同じ語順である(越前谷 2005: 41-63)。また、北海道アイヌの口承に見出せる交差対句は、日本語をしたテキストの場合でも保持され、消えてしまうわけではない(大喜多 2012: 181-213)。このことから、樺太アイヌのテキストである浅井の口承の場合も、修辞構造を理解する上では日本語テキストを用いても支障がないと筆者は判断した。なお、引用元のテキスト(村崎 2009)では、「トゥイタハ」の挿入歌といくつかのアイヌ語による言葉がアイヌ語のローマ字表記になっている関係上、本稿においてもそれに準じて表記している。

さて、村崎(2009)には、「トゥイタハ」における「物語の類型」が次の(a)～(e)に

⁴ 本稿では、交差対句を確認できる資料として3例、交差対句が確認できない資料として1例紹介している。

⁵ ウチャシクマには「挿入歌」が入らない。

⁶ オヤシは「化け物」のことである。

⁷ 本稿では「ウウエペケレ」という日本語表記を使用した。文献によっては、「ウウエペケレ」を「ウエペケレ」と表記する場合もある。なお、「ウウエペケレ」という呼称については、この呼称を用いない地方もある。

分けられると書かれている。

物語の種類⁸

- (a)人間と同じように暮らしている動物が登場する話。カラス、白鳥、イヌ、アザラシ、カエル、シャケ、カニ、フグなど。【鳥獣草木譚】
- (b)動物と人間の結婚、恋など、交わりの話。【異類婚姻譚】
- (c)人肉を食うオヤシ（お化け、goblins or ogres）の話。【怪異譚】
- (d)嫁取り、婿取りをするために冒険をする話。【冒険譚】
- (e)同じ冒険が3人兄弟（姉妹）の間で繰り返される話。【3人きょうだい譚⁹（丹菊 2012: 67-76）】

しかしながら、村崎（2009）は、資料紹介に主眼が置かれているので、掲載されたそれぞれの「トゥイタハ」が、具体的に、(a)～(d)のどこに分類されるかについてのコメントはなく、修辞論的な視点からの言及や交差対句についての指摘もない。

本稿では、上記の種類の中でも、(c)怪異譚、(d)冒険譚、(e)3人きょうだい譚から、筆者が代表的であると判断した編をそれぞれ1編ずつ選択し、本稿におけるテキストとした¹⁰。なお、それぞれの譚の中での「代表的な1編」を選択する際、次の3点(①～③)を考慮している¹¹。

- ①似たような内容の「物語」が複数回収録されている。
- ②採録日時がより古いもの。
- ③怪異譚・冒険譚・3人きょうだい譚が互いに混交していない、もしくは混交の度合いが小さいと解釈できるもの。但し、鳥獣草木譚や異類婚姻譚との混交の如何については特に考慮しない。

怪異譚としては、1984年4月17日収録分の「さらわれた娘 - 84」¹²をテキストとした。「さらわれた娘」と題される物語が『浅井タケ昔話全集 I, II』には3編（1984年4月17日収録分、1988年8月23日収録分、1992年5月17日収録分）が収録されている。採録された類話の中でも最も古い一編が1984年4月17日収録分である。

冒険譚としては、「箱流しの話」と題される物語は2編（1988年8月23日収録と1991

⁸ (a)～(e)の種類について、村崎の記述には、【～譚】という名称が記載されていないので、便宜を考慮し、筆者が名称を記した。一般的に、物語種類の分類には曖昧さが伴う場合がある。

⁹ この種の譚における登場人物は「3人兄弟」である場合と「3人姉妹」の場合があるので、敢えてひらがなによる表記「3人きょうだい」とした。

¹⁰ ここで、本稿におけるテキストを選択する上で、「物語の種類」を指標としたのだが、これは、「物語の種類」と交差対句との関連性を議論することが目的ではない。あくまでも、便宜上の理由である。

¹¹ テキストを選択する際に生じる筆者の主観による影響や恣意的要因を極力排除する目的で①～③の項目を設けた。

¹² この「さらわれた娘」は、(a)鳥獣草木譚、(b)異類婚姻譚、(d)冒険譚、(e)3人きょうだい譚と混交していない。

年5月6日収録)が掲録されている。この2編の内でも古いものは1988年8月23日収録分の「箱流しの話」¹³であり、これを本稿でのテキストとした。

3人きょうだい譚としては、一連の3人きょうだい譚で最も採録時期が古いものが「頭蓋骨-84(娘編)」(1984年4月22日採録)であるが、録音が途中で途切れている。次に古いものは、「ポヌンカヨ-86」(1986年10月19日採録)であるが、この物語の場合はオヤシ(お化け)が登場するので、(c)怪異譚と(e)3人きょうだい譚との混交型であると言える。したがって、3番目に古い、「フンドシをとられた話」(1986年10月26日採録)を本稿におけるテキストとした¹⁴。この「フンドシをとられた話」は、途中で録音が途切れておらず、オヤシも登場しない¹⁵。

なお、残りの(a)鳥獣草木譚、(b)異類婚姻譚について、もしくは、「物語の類型」と交差対句との関わりについては別の機会に報告したいと思っている。

5. 「さらわれた娘-84」(怪異譚)

以下、「トゥイタハ」における事例を紹介する。はじめに、怪異譚に該当する「さらわれた娘」の中でも、1984年4月17日に収録されたテキスト(本稿では、『浅井タケ昔話全集I, II』に準じ、「さらわれた娘-84」とする)の全文を記載する(記号と下線は筆者による)。

「*maas pontara pii tara pii*」 A わしがマオカに行った時、この昔話を聞いたが、また違うものだった。(ああそう。M)

B あのう、おばあさんが、...(あなたもお話してください。M) ババが一人いたとき。ババが一人いたんだとき。ババが一人いて、子どもを育てていた。小さな女の子が2人いて、一人は水汲みに川へ下りて行って、水に落ちて、死んだとき。

それでその後は小さな、一番小さい子が一人いたとき。が、育てていたらやがて、こんどあのババ、'*ahcahcipo* っていうんだ。('*ahcahcipo*? それどういうこと。M) 「おばあさん(*ahci*)」 っていう人。(ああ。M) 「おばあさん(*ahci*)」 のことは昔話の中では

'*ahcahcipo* っていうんだ。(へえ、'*acahcipo*? M) '*ahcahcipo*。(どんな? M) こんど、あの、その子どもと2人で、(アイヌ語で言ってください。アイヌ語で言ってください。アイヌ語で言ってください。M) C 子ども、小さな子どもである娘を連れて砂浜へ下り

て行ったとき。

砂浜へ下りて行ったら、たくさん砂浜に貝がうちあげられていたとき。

(そうですか。M)、貝。(分かります。貝、分かります。M)、2人でそれを拾ったとき。拾ってから2人とも家へ入って、D 帰って、暮らしていたら、E そのうちウンカ

¹³ 「箱流しの話」にはオヤシや3人きょうだいが登場しないので、(c)怪異譚や(e)3人きょうだい譚との混交譚ではない。また、(a)鳥獣草木譚や(b)異類婚姻譚とも混交していない。

¹⁴ 一連の3人きょうだい譚については、何を因子として類話とするかという点で判断が難しい。したがって、似たような内容の「物語」が複数回収録されているかという観点以上に、採録日時の古さを優先してテキストを選んだ。

¹⁵ ただし、(b)異類婚姻譚とは混交している。

ヨといって、そいつは化け物だ。(ウンカ? M)、ウンカヨ。(ウンカヨ? M) うん。(化け物? M) 化け物。(へえ、どんな化け物? M) そいつが入って、そしてその子どもを取って抱えて外へ出たとき。F 抱えて出て、その後はババは一人でいたがそのうちに後から外へ出ると、その子どもが泣いているのをウンカヨが背負って行くところだったとき。(笑い声)。G そうしたら、こんな具合だった。泣いていたのだが、Xそれは、

maas pontara pii

tara pii tara pii tara pii

atuy soo kuru kaa

cii hawe sunka

cii hawe suyee

maas pontara pii

tara pii tara pii tara pii

といて、G´泣いているのをウンカヨが背負って行くところだったとき。

F´そうしていたら、ババが後から、砂浜へ下りて行って、その子どもを追いかけたとき。追いかけたら、

「どうもわしが悪かったようだから、後から来たよ」と言って、孫、孫娘の行った後について行ったとき。そこに行ったとき。

E´行ってあたりを見ると、海原から一匹の大きなアザラシが上がって来たとき。一匹の大きなアザラシが上がって来て、その子どもをウンカヨの背中から取り上げたとき。取り上げて抱えて海の沖の方へ行ってしまったとき。D´それからババはそれを見て、泣きながら家に帰って、しばらく暮らしていたが、C´ある日見ると、若い娘が砂浜の方から(家の方へ)上って来たとき。何か背負って上って来たとき。

背負って上って来て家へ入って来たのを見ると、クジラの脂だったとき。クジラ、クジラの脂だったとき。それから、子どもを育ててその脂を炊いて、保存用に分離して、その孫娘と一緒に、孫娘のことは *mahmicihi* っていうんだ。(うん、分かります。M)B´その子と一緒に食べているうちにその娘は少し大きくなった。少し大きくなると、炉ぶちのところへ行っては炉ぶちと自分の背を比べるのだとき。まだ炉ぶちよりも短い。また少し経ったらまた炉ぶちと自分の背を比べたらもう自分の背のほうが長い。いま炉ぶちより大きくなってもう婿取りができるほどになった。婿取りができるほどになって、それから婿をとってそしてそれからその、暮らしていたがやがてババは死んだとき。

その後で娘は夫と2人だけで暮らしていたが、やがて子どもが出来て、たくさん子どもが出来て、そして子どもたちにもいろいろお話をして聞かせた。(caskumahci?M)

お話を聞かせて、子どもたちも成長してみんな一人前になって、そして空に行く鳥も皆、羽を落とすので、それを拾ってホウキを作ったりハシにしたりしたということだ。

A´こういう昔話だ。

このテキスト「さらわれた娘 - 84」に付された記号 A~G・A´~G´とX(ギリシャ語の

カイ) 16を順番に配列すると次のようになる。

- A この昔話を聞いた
B ①娘が1人死ぬ
②残った娘と2人の生活
③1人が育つ
C 貝を拾って帰る
D 暮らしていた
E ウンカヨが娘を背負って浜へ
F 娘を追いかけるババ
G 娘が泣いていた
X 挿入歌
G´ 娘が泣いていた
F´ 娘を追いかけるババ
E´ アザラシが娘を抱えて沖へ
D´ しばらく暮らしていた
C´ 若い娘がクジラの脂を背負って帰還
B´ ①ババが死ぬ
②娘と夫(2人)の生活
③たくさん子供ができる
A´ こういう昔話だ

このテキストには、合計7対の対応を確認することができる。まず、AとA´については、浅井が以前マオカ¹⁷で聞いた、この「昔話」の類話について言及した箇所(A)と、「こういう昔話だ。」という言葉で「トゥイタハ」を語り終えている箇所(A´)が対応している。語句としては、「昔話」という言葉が共通している。

Bでは、「娘」が1人死んだあと、残ったもう1人の「娘」と「ババ」という「2人」の生活の場面となり、残された1人の「娘」を「ババ」は育てたことが描かれている。一方のB´には、「ババ」が死んだあと、残った「娘」の夫婦が「2人」で生活し、その後、たくさんの子供たちが生まれ、夫婦はその子供たちを育てる場面である。ここでのB・B´では、担当する人物は変化するものの、3人のうちの1人が死に、2人が残ったあと、子供が生育する場面となるという文脈が類似している。

続くCとC´については、両方ともに、海の産物を、「娘」(Cの場合は「娘」と「ババ」)が運ぶ場面である。Cの場合は、「娘」が「ババ」と一緒に「貝」を運んでいるのに対し、C´では、成長した姿になった「娘」が「鯨の脂」を背負って帰還している。

Dでは残された「娘」と「ババ」が暮らす様子があり、D´は、「娘」が「アザラシ」に

¹⁶ 交差対句の折り返し箇所に語句が配置されている場合、その折り返し箇所に付される記号をX(ギリシャ語のカイ)とする慣例があるので、本稿でも、その慣例に従い、折り返し箇所の記号をXとした。

¹⁷ 「マオカ」は地名である。

よって沖に連れて行かれた後、「ババ」が1人で暮らす様子である。

そして、EとE'では、共に、「娘」が連れて行かれる場面である。Eでは、「ウンカヨ」が「娘」を背負い連れて行こうとしているのに対し、E'では、「ウンカヨ」から「娘」を取り上げた「アザラシ」が、「娘」を抱えて沖へと向かっている。

FとF'は、共に、「ババ」が「娘」を追いかける場面である。また、G・G'は、両方とも、「娘」が泣く様子が書かれている。

ところで、この「さらわれた娘 - 84」の場合は、Xに「挿入歌」が配置されていると解釈することができる。北海道アイヌの口承に確認できる交差対句には、Xを確認できない場合が多い。アイヌの口承における交差対句の構造についての研究は、未だ萌芽的研究であるので、「さらわれた娘 - 84」に確認されたXについては、この文献のみに見られる特異例であるのか、それとも他の資料にも確認できるのかという疑問については、今後の調査が必要である。

6. 「箱流しの話」(冒険譚)

1988年8月23日に収録された「箱流しの話」の日本語訳全文を引用転記する。なお、施された記号と下線は筆者による。

A サンヌピシ村に一人の男が妻と暮らしていた。一人の男が妻といて、暮らしているうちに、子供が生まれた。男の子が生まれた。B 男の子が生まれて育てた。育てているうちに、今もう大きい大人になったとき。だけどまだあまり小さくなくてまだ小さかったけれども、魚とりもよくできたし、マキとりもよくできたとき。C そうしてからある日、その男は魚をとっては食べ、マキをとってはたき、そうしているうちにある日、その男が出かけたあとでその娘はその夫にこう言ったとき。

「ねえお前さん、箱を作っておくれ。あの子を中に入れて流すから。」と言ったとき。(どうして流してやるの? Si)流してやるって言うんだとき。そうしたらこんど男が言った通りにこんど、箱をこしらえたんだとき。板でこしらえたんだとき。(アイヌ語で言ってください。M) 箱を作ったとき。箱を作ってから男が山から下りて来たとき。箱はアイヌ語でも同じだよ。sipohは宝物を入れるものだよ。箱を作ったら、男が山から下りてきたとき。山から下りてきて父さんに聞いたとき。「何の箱なの?」と言うと、「お前を遊ばせるために作ったんだよ。」と言ったとき。D それから箱を作ってしばらくして「ねえ坊や、中に入ってごらん。」と言ったとき。そうして、小さい男がその箱の中に入ると、すぐ板で全部口を閉めて釘でふさいだ。E ふさいでから、水の中に投げて流したとき。そうして、ずっと今その男、女、男はすぐ川に沿って流れた。F 流れて、下って泣きながら下ったとき。

G ha'ii mahpa cooruntee

monimaa kurukaa cooruntee

ha'ii mahpa cooruntee

'ooyoo kante cooruntee

ha'ii mahpaa cooruntee

monimaa kuru kaa cooruntee

ha'ii mahpaa cooruntee

と云って **H** 泣きながら川を下ったとき。 **I** それからどうなったのか分からなかったとき。 **J** そうしているうちに、こんど話は変わって、ある村に一人の娘がいたとき。娘が一人いて、お裁縫や、マキとりをして、魚とりをしては食べ、ユリ根を掘っては食べ、お裁縫をしていたとき。そうやっているうちにある日、お裁縫をしていたら無性に浜へ出たくなったとき。浜へ出たいから、「どうしてこんなに浜へ行きたいんだろう？」と不思議に思ったけれども、浜辺へ下りて行ったとき。浜へ下りたら、そこに箱が一つ流れて来た。 **K** 自分のうちのすぐ前に上がったとき。それで箱のところに行きたかったので、そこへ行ってみた。ふたを開けたかったのでそれからふたを開けたとき。 **L** 開けたらその中に髪の毛ばかり入っていたとき。髪の毛ばかり入っていて、その髪の毛を引き上げ引き上げして見ると、 **M** 子どもの小指が半分その中に入ったとき。 **N** そうしてその半分の小指を今持つてうちへ帰ったとき。 **O** それを晴れ着でくるんで子守をし、子守をし、 **P** そうして今見るとりっぱな美しい男の子になっていたとき。 **P'** そうして今美しい男の子になって **O'** 育て育てていたら、(魂だべさ。 **Si**) **N'** 育てて育てているうちに今大きくなったとき。 **M'** 大きくなって **L'** 今ある日、こう言ったとき。「どこかに行って見て、だれか男でもそこに行って見て、だれかそこにいるかいはいか見に行ってみよう。」と言ったとき。そうして今それから、出かけたとき。ずっと行くと一本の道が山からずっと下がっていたとき。その道をずっと山の方へ上っていくと一軒の家があったとき。 **K'** その戸を開けて入ったら、一人の男が妻と一緒にいたとき。 **J'** そしてそこに入って今みんな喜んで、「どこから来たお方ですか?」「私は遠い村から来た男だ。」と言ったとき。そうしてユリ根をほって煮て食べさせみんなで食べた。しばらくして男が言ったとき。「あの、歌を聞きたくありませんか。」とたずねたとき。「歌が聞きたかったら、歌って聞かれますよ。」と言ったとき。そうして今、歌を歌ったが、歌はいままで聞いたことがないと言った。「歌が聞きたいよ。」と二人は言ったとき。 **I'** そうして今その男はその間に座ったとき。その娘と男の間にその子は座って、 **H'** そこで歌を歌ったとき。

G' ha'ii mahpa cooruntee

monimaa kurukaa cooruntee

hovoo kante coruntee

ha'ii mahpaa cooruntee

monimaa kuru kaa cooruntee

ha'ii mahpaa cooruntee

monimaa kuru kaa cooruntee

「**F'** これはよい歌だ。」と二人は言ったとき。 **E'** そう言ってから今度は娘が言ったとき。「あのね、お前の子どもじゃないか。」と言ったとき。「男の子だから、本当にそうだよ。」と言ったとき。 **D'** それを聞いたとたん、その子は飛び出したとき。 **C'** その子が飛び起きたところを、その腹のところをつかもうと、腹をつかもうとしたら、その夫婦は互いにくっついてしまったから、一人が「離してくれ!」、もう一人が「離してくれ!」、と声をあげた。見ると、その子は逃げ出して、そこから、浜の方に下りて

行って、うちへ帰った。娘もまた下りて行ったとき。下りて行って、その娘が行った。
B´また娘とそこで暮らしているうちに立派な男になって、A´その娘と夫婦になって、
 幸せに暮らしたとき。そうしてからあの男、あの女はどうしているかと思ったので、
ちょっと行ってみたいなと思ったので行ってみると、みんなそこは山になってしまっ
 ていたとき。いろいろな木、あのう、エゾマツやマツやシラカバの木などの林になっ
 ていたとき。そうして見てから、帰ってすぐ妻に話したとき。「お前が私を生き返らせ
 てくれたから、仇をとってきたよ。」
 と言ったとき。「お前が子守をしてくれて、それからあの男と女から逃げてきて、その
 後あそこは林になってしまった。」
 と話をしたとき。そういう昔話だ。こんなのがあった。

ここで、付されたA~PとA´~P´の記号にしたがって配列すると次のように表示される。

- A 「男」と「妻」が暮らしていた
- B 「息子」の成長
- C ①悪事を計画する「男」と「妻」
②「息子」が山から下りてくる
- D 「息子」が箱に閉じ込められる
- E 「息子」が川に流されてしまう
- F 「息子」が泣きながら川を下る
- G 「息子」の泣き声(挿入歌)
- H 「息子」が泣きながら川を下る
- I 「息子」の喪失
- J ①ある村
②ユリ根
③浜に行きたい
- K 「娘」が箱を開けた(開ける行為)
- L 「娘」が髪の毛を引き上げる(探し出す行為)
- M 「娘」が子どもの小指の半分をみつける(小さい)
- N 「娘」が小指の半分を家に持ち帰る(小さい)
- O 「娘」が子守をする(養育する)
- P 美しい「男の子」になる
- P´ 美しい「男の子」になる
- O´ 「娘」が「男の子」を育てる(養育する)
- N´ 「男の子」が大きくなる(大きい)
- M´ 「男の子」が大きくなる(大きい)
- L´ 「男の子」が人を探しに出かける(探し出す行為)
- K´ 「男の子」が1軒の家の戸を開ける(開ける行為)
- J´ ①遠い村
②ユリ根

③歌を聴きたい

- I´ 「息子」の帰還
- H´ 「息子」が歌を歌う
- G´ 「息子」の歌（挿入歌）
- F´ 「男」と「妻」 「これはよい歌だ」
- E´ 「妻」気がつく 「息子ではないか？」
- D´ 「息子」が飛び起きる
- C´ ①悪事に対する報いを受ける「男」と「妻」
②「息子」と「娘」が浜の方へ下りる
- B´ 「息子」が立派な男になる
- A´ 「男」と「妻」が山になる

Aには「男」と「妻」が暮らしていた様子と「息子」の誕生が書かれている。それに対し、A´には、この「物語」の結論として、「男」と「妻」が「山」になってしまったことと「息子」の結婚が書かれている。AとA´には、共に「男」と「妻」の様子が描かれてはいるものの、その状況は激変しており、言わば「正反対」の様相となっていることが解る。同時に、AとA´は、この物語に描かれている一連の出来事がもたらした変化の「前」と「後」における様相が表現されている。

BとB´には、共に、「息子」が成長していく姿が描かれている。Bでは「息子」は、「男」と「妻」のもとで暮らしつつ成長し大人になるが、一方、B´では、「息子」は、「娘」と共に暮らして立派な男になっている。「息子」を取り巻く環境については、BとB´では異なっているが、「息子」が成長して一人前になるという点でBとB´では一致している。

Cでは「男」と「妻」が「息子」への悪事を計画する場面の後に、「息子」が山から下りてくる場面が描かれている。それに対し、C´では、「男」と「妻」が悪事の報いを受けてしまった後、「息子」と「娘」が浜の方へと下りて行く場面である。このように、CとC´に書かれている出来事は似ている。さらに、「男」と「妻」は、Cでの「悪事」が原因でC´で報いを受けている。このことは、CとC´が「原因」と「結果」の関係で結ばれていることを表している。

Dには、「息子」が箱に閉じ込められる様子が書かれている。一方、D´には「息子」が飛び起きる様子が書かれている。ここで、Dで描かれた「閉じ込められる」こと（内向きの動作）と、D´に描かれた「飛び起きる」こと（外向きの動作）とは、正反対の動作であると解釈することができる。また、Eは、「息子」が、「男」と「妻」のもとを離れ、川を流れて行ってしまう場面であり、逆に、E´は、目の前にいる若者が自分たちの「息子」であることを「男」と「妻」が気付く場面である。換言すれば、Eは「別離」の様子を表しており、一方のE´は「邂逅」の様子を表現しているように見える¹⁸。

また、F・G・HとF´・G´・H´では、それぞれ「息子の泣き声」と「息子の歌」が対応している。特に、GとG´では、「息子の泣き声」と「息子の歌」が挿入歌になってお

¹⁸ D・D´およびE・E´の対応については、口承に描かれた事柄に対して筆者が解釈を加えることで対応としている。

り、その二つの挿入歌が対応関係にある。「泣き声」と「歌」は、共に「声」による表現手法である。

Iは、「息子」の行方がわからなくなってしまう場面である。一方のI'は、お互いに親子であるという認識はないものの、「男」と「妻」のもとに帰って来て座する「息子」の姿が書かれた場面である。

JとJ'では、「村」と「ユリ根」という言葉が共通している。また、Jでは、「娘」が無性に浜に出たいと思うのに対し、J'では、「男と妻」が、「息子」の歌を聞きたがる場面である。この両者は、「感情の動き」に伴う「行為」が表示されているという点で共通している。

Kは「娘」が「箱」を開ける場面であり、一方、K'は、「息子」が「1軒の家の戸」を開ける場面である。この両者では、「行為者」がK「娘」とK'「息子」であり「行為の対象物」がK「箱」とK'「1軒の家の戸」というように異なっている。しかし、「開ける」という「行為」が描かれている点については一致している。

また、Lは「娘」が髪の毛を引き上げる場面であり、L'「息子」が人を探しに出かける場面である。この場合も、「行為者」は、L「娘」とL'「息子」であるので異なる。しかし、「探す」という行為が描かれているという点では一致している。

MとNでは、「小指の半分」を「娘」が見つけて家に持ち帰っているのに対し、M'とN'では、「小指の半分」が「男の子」になっている。両者において「男の子」の大きさという観点ではM・NとM'・N'は対照的である。また、M・Nについては、「男の子」が「娘」に育てられる「前」であるのに対し、逆に、M'・N'は、「男の子」が「娘」に育てられた「後」の様子である。

OとO'には、「娘」が「男の子」を養育する場面が書かれている。また、PとP'には「美しい男の子」になったという記述がある。以上のように、「箱流しの話」は合計16対の対応による交差対句として解釈できる。

7. 「フンドシをとられた話」(3人きょうだい譚)

最後に、村崎が1986年10月26日に収録した浅井による「フンドシをとられた話」の全文を以下に転記する(記号・下線は筆者による)。

A サンヌピシ村に3人の男がいた。男が3人にてイチバン年下の、デナイ、年上の男が浜に出たとき。浜に出て泳いだら、B泳いで泳いでいたら、フンドシがぬれた。フンドシがぬれた。フンドシがぬれたからこんど木の上に干しておいたそうだ、フンドシを、(最初にアイヌ語で言って、それから日本語で言ってください。M)
それで、フンドシがぬれた、フンドシがぬれたから脱いで、浜に上がった。木の上に干して置いた、寄り木の上に置いたとき。そうしたら、山のほうからカラスが降りてきたとき。

karararaa kira'uu tohtee

karararaa kira'uu noyvee

karararaa kira'uu tohtee

と鳴いたとき。

そうやってから、山のほうへ上って行ってしまったとき。今見ると、男の下着を取って逃げて行ったとき。

それから男はそれを怒って、Cうちに帰って、裏山のエリマキの木の皮を裂いて、頭に巻きつけた、そのエリマキの木の皮を頭に巻きつけて家へ入った。入って寝たとき。

寝て、

D①「ねえ、兄さん、兄さん。どんな化け物に会ったか話してちょうだい。聞くから」と言ったけど、兄さんは寝てしまったとき。

それから、そうして、青の真ん中の男が、今度またそこへ泳ぎに降りてきたとき。泳いでフンドシがぬれた。脱いで上がった。木の上に掛けておいた。寄り木に掛けて、それから浜辺に座ったり、寄り木に腰掛けたりしていると、一羽のカラスが山から降りてきたとき。

karararaa kira'uu noyyee

karararaa kira'uu tohtee

karararaa kira'uu noyyee

と鳴きながらカラスは、山の方へ行ってしまったとき。そうして、今度見たら、その男の下着を今度盗んで持って行って、山の方へ行ってしまったとき。

それから今、その男は怒って、家の方へ上って行ったが、家へ帰って行ったら、お兄さんが皮をはいでいたとき。皮をはいで、それを帽子にしていたが、それから（弟が）家に入ってきたとき、

「やあ、弟や、あのね、いったいどんな化け物に会ったか、兄さんに話して聞かせておくれ、聞くから」と言っても、弟は何も言わずに寝てしまったとき。

寝ていたら今度その一番下の男が泳ぎに浜へ出たとき。泳ぎに浜に出て、泳いでいるうちにフンドシがぬれた。それで脱いで、流木の上に置いた。流木の上においていたが、そのうちに、カラスが一羽飛んで下りて来たとき。カラスが来て、

karararaa kira'uu tohtee

karakaraa kira'uu noyyee

karararaa kira'uu tohtee

と鳴いたとき。

そうしてから見ると又山の方へ行ったしまったとき。見ると、その、自分のフンドシを取って行ってしまったとき。取って行ってしまったとき。

D②それで、それから、その後をつけて行ったとき。追っかけて行ったら、そのカラスの跡をたどって草をかき分けて曲がって、その道をたどって上って行ったら、一軒の家があったとき。

一軒の家があってそこに入ってみたら、中は真っ暗だったとき。真っ暗で、その入った家にしばらくいたのだが、そのうちに、朝の煙が窓から半分、戸口から半分出て、だんだん明るくなった。夜が明けたとき。

あたりを見ると、そこには娘が3人いる様子だった。娘が3人いるらしく、一番上の娘の寝床の上からは、その一番上の男のフンドシがその寝床に下がっていた。それから真ん中の娘の寝床からはその真ん中の男のフンドシが、その寝床の上にかかっている

た。それから、自分のフンドシが一番下の娘の寝床にかかっていた。こう、かかっていたとき。

見ると、そこに一人の老婆がいたとき。一人の老婆がいて、そこで、糸を紡いでいたとき。それで、その老婆はこちらを見て、

D③「ねえ、男や、この前はあの上の男に嫁を世話したかったから、そのフンドシを持って上がってきたけれど、当人は怒って、家へ帰って寝てしまった。後で真ん中の男のフンドシを又持って逃げてきたが、これもまた寝てしまった。一番下の男も同じようにしたら今度はすぐ私を追いかけて来たのだよ。」

と言った。こう言ったので、

E「あのね、ここで待っていなさい。ユリ掘りに行った娘たちが、踊りながら下って帰ってくるから。もうよそへ行かないで待っていなさい。」と言ったとき。

そうして今しばらくそうしていたら娘たちが踊りながらそこに山から下りてきたとき。

F *koo wehtaa koowehtaa*

koo wehwehtaa koo wehtaa

koo wehtaa koowehtaa

と、こうやって踊りながら下りてきたとき。

今度、老婆はこれを聞いてこう言ったとき。

「ほら、今この娘たちは、踊って来るのに<*koo wehta koo wehwehtaa*> といって来たよ。F´私等が初めて踊った時は、<*he'uketu kannee 'ehum, 'okesuh kannee 'ehum*> といって踊ってきたものだ。」と言ったとき。

E´それから娘たちはユリ根掘りをして帰ってきて、ユリ根を料理したとき。料理して今度はそれを男に食べさせて、自分も一緒に食べた。しばらく食べてからそこに泊まった。泊まってその翌日、

「ねえ、娘たちや、この若い男と一緒に下って行きなさい。」と老婆は言ったとき。それで、その男と一緒にみんな下りて行ったとき。その家の近くまで行ったら、その男の兄さんたちの泣く声がしたとき。そのなく声が聞こえた。

'ihi 'ihi

'ahkapo 'ahkapo wen kusu

'ihi 'ihi

yuhpo yuhpo pirikaruy

yuhpo yuhpo

'ihi 'ihi

yuhpo yuhpo wen kusu

'ihi 'ihi

'ahkapo 'ahkapo pirikaruy

'ahkapo 'ahkapo

D´①「お化けたちが人間の腹を裂いたんだよ」

と言って泣いていたとき。

D´②そうすると、そこへ、まっさきに男が戸を開けて跳んで入ってきたとき。

D´③「おやおや(娘さんや)、おやおや兄さんたち、一体何を泣いているんだ。パパ

から嫁を見つけるように言われていて、それで怒って泣いているのか？」と言ったとき。

そう言って今、兄さんたちは頭をみんな坊主にしてしまったとき。

頭を坊主にして泣いているのだった。

C´「お前たち、頭をつけなさい。頭をつけなさい。お前たちの嫁さんたちが入ってくるから。」

そうして、その糊を作ってその頭の上にはりつけては落とし、はりつけては落としして、そうやっているうちに、娘たちが3人連れ立って入ってきたとき。

B´それから、男たちは恥ずかしがって、頭を上げることもできないでいた。それでこんど、それで起きたんだ。

ご飯を作ってそれを、食べたとき。食べてから、A´イチバン上の娘はイチバン上の男と夫婦になった。中の娘は中の男と夫婦になった。イチバン下の娘はイチバン下の男と夫婦になってそして、幸せに暮らしていたが、そのうち、今みんな子どもを持って、たくさん子どもに恵まれて、空を飛ぶ鳥たちもみんな手羽を落とし、それでホウキでもハシでも作ることができたとき。

ここでも、施された記号・下線にしたがって配列すると次のように表記できる。なお、このテキストには五つの挿入歌が組み込まれている。これらの挿入歌を、「トゥイタハ」のはじめの方に配置されたものから順に、①～⑤と符番した。

A 3人の男がいた

B フンドシをとられる [挿入歌①]

C エリマキの木の皮を頭に巻きつける

D ①どんな化け物か？

[挿入歌②]

[挿入歌③]

②カラスの家に入る

③結婚させたかったカラスの老婆

E ユリ根を掘りに行くカラスの娘

F カラスの娘たちの踊り [挿入歌④]

F´カラスの老婆の踊り

E´ユリ根を持ち帰るカラスの娘

[挿入歌⑤]

D´①化け物の仕業

②男たちの家に入る

③ババが結婚しろと言ったのか？

C´髪を頭に糊で張り付ける

B´恥ずかしい

A´3人の男が結婚し子供ができる

AとA´は、3人の「男たち」の紹介である。AとA´の関係は、この物語の出来事によってもたらされた変化の「前」と「後」に相当している。

Bでは「男」がフンドシを盗られている。それに対し、B´では、坊主頭を恥ずかしがる「男たち」の様子が描かれている。BおよびB´は、両方とも、もともと有ったものが無くなってしまった様子を描いているという点で共通している。

CとC´では、「男」が頭に何かを付けるという行為が一致している。ただし、「男」が頭に付けた「もの」は異なっている。

DおよびD´では、「化け物」¹⁹についての話、「家」に入る行為、そして、「男たち」に結婚を促す行為もしくは言葉が、それぞれ連続して記載されている点が共通している。

Eにはユリ根を掘りに「カラスの娘たち」が出かけていく様子が書かれており、一方、E´では、「娘たち」がユリ根を持ち帰り、それを料理している。

そして、Fには「カラスの娘たち」による踊りが記載されている。それに対し、F´は、「カラスの老婆」の踊りが書かれている。

以上のように、この「フンドシをとられた話」は、合計6対の対応からなる交差対句を主軸とした構造として解釈できる。

ここで、①～⑤に符番された挿入歌については、対応関係にないことがわかる。一方、「さらわれた娘 - 84」における挿入歌は「トゥイタハ」の折り返し箇所(X)に配置されており、「箱流しの話」の場合は、二つの挿入歌が対応関係を結んでいるので、何らかの形で交差対句の構築に関わっている。挿入歌の挿入が交差対句形式に与える影響については、別途、他の「トゥイタハ」の場合と照合する必要がある。

また、「フンドシをとられた話」の場合は、D①とD②の間や、D②とD③の間²⁰、さらには、E´とD´①の間のそれぞれの箇所は、比較的領域は広いものの、対応とは関わらない箇所として解釈した。このことから、筆者は、「フンドシをとられた話」は他の2編に比べて交差対句を構築する性向が小さいと解釈した。

8. 交差対句が見出せない事例「さらわれた娘 - 88」(怪異譚)

第5～7節では、交差対句を見出すことができる「トゥイタハ」の事例を紹介した。本節では、村崎(2009)に掲載された浅井の「トゥイタハ」の中でも、交差対句を見出すことができないと解釈できる事例を紹介する。以下の「トゥイタハ」は「さらわれた娘 - 88」(*maas pontara pii*)と題されており、1988年8月23日に録音されたものである。この「さらわれた娘 - 88」は、本稿第5節で紹介した「さらわれた娘 - 84」の類話であり、怪異譚に分類できる。また、「さらわれた娘 - 84」と比べるとかなり短い。

¹⁹ ここでは「化け物」が書かれているが、実際は「化け物」ではなくカラスの老婆であるので、人食いお化けが登場する怪異譚ではない。むしろ、「フンドシをとられた話」は、3人きょうだい譚と異類婚姻譚との混交譚であると言える。

²⁰ 「3人きょうだい譚」は、長男と二男が同じことを繰り返し「失敗」するのに対し、末弟が一番勇気があり、この末弟が「化け物」退治をする、もしくは「化け物」の正体を明らかにするというパターンを持っている。B～D③までの領域は、3兄弟が同じような事柄を再現する箇所である。このB～D③に対応するD´③～B´箇所には、3人兄弟が同じ行為を再現する様子は描かれていない。

あのね、ある村で一人のババが小さい娘を育てていたとき。(そうなんだ。M) 娘を育てていた。

ずっと育てていたが、まだ小さいときに、お化けが一人家に忍び込んでその娘をさらって背負って出て行ったとき。

それでその子は泣いたとき。

maas pontara pii,
tara pih tara pii, tara pii
'atuy soo kurukaa
cihawesunka cihawesuye
maas pontara pii,
tara pih tara pii, tara pii

といて泣いたとき。

そう子どもが泣いていると、あのう、後ろの方から、

「どうもわしが悪かったらしい。それで後から来たよ。」

という声がしたとき。

見ると、ババが追いかけて来たのだった。

そうしてそのお化けがおぶっていた娘を、そのババは、とって、連れて一緒に帰ったとき。

お化けはこうブツブツ文句を言ったとき。

「あのなあ、もう少し大きい子だったら、煮て、殺して煮て食おうかと思ったが、まだ小さい子だから、肉も柔らかくておいしくないだろう。」

と言って、お化けは怒ってそのまま行ってしまったとき。それだけの話だ。

このテキストの場合、交差対句が主要な修辞技法と使用されているとは解釈し難い。

9. 考察

本稿では、浅井による4編の「トゥイタハ」を題材として、これらのテキストについての修辞論的な分析を試みた。その結果、第5節から7節で紹介した3編のテキストには、交差対句形式と解釈できる構造を見出すことができたのであるが、一方で、第8節では、交差対句が修辞技法として使われていないと解釈できる「トゥイタハ」の一例を示した。このことは、浅井の「トゥイタハ」には、交差対句法が使われていると解釈できるものと、逆に、交差対句が使われていないと判断できるものがあることを示している。また、同じく、交差対句が見出せる「トゥイタハ」でも、第7節の「フンドシをとられた話」は、第5節の「さらわれた娘 - 84」や第6節の「箱流しの話」と比べ、交差対句とは無関係な「句節」が占める領域が広いことがわかった。このことをまとめると、次の2点として示すことができる。

①浅井を話者とする「トゥイタハ」には、修辞技法として交差対句が使用されていると

判断できるものと交差対句が出現しないものがある。

②交差対句形式が占める領域には差異がある。

このように、浅井の「トウイタハ」では、それぞれの「トウイタハ」によって、交差対句の出現有無や領域の差異が認められることがわかったのだが、この有無や差異に対して、どのような因子が影響を与えているのかという原因を議論するには、本稿で提示したデータでは不十分である。

今回は、村崎が収録した浅井による「トウイタハ」にのみ注目した。樺太アイヌの新たな口承資料を採取することが難しくなった現在、樺太アイヌの口頭文芸を研究するためには、既に採録されている資料を分析するしか手立てがない。したがって、「トウイタハ」を語る際、浅井が意図的に交差対句を入れ込んだのか、それとも交差対句が無意識下で表出した修辞であるのかという問題は、今となっては、直接的には確認することができない。

また、交差対句が見出せるものがあるという点では、本稿で採り上げたテキストは、本稿の第3節で示した北海道アイヌにおける特徴と一致している。このことは、口承に見出される交差対句が、少なくとも浅井という一個人の「語り」の特徴（語り癖）ではないことを示している。しかし、樺太アイヌの話者に広く見出せる特徴であるということを、浅井という一人の話者における場合のみで結論付けることは短絡的であろう。筆者としては、他の樺太アイヌ口承話者による資料についても、これから調査をしたいと思っている。

第4節では、テキストを選定する際に生じる可能性がある「恣意による影響」に配慮し、筆者が設定した3点の考慮点を示した。その際、そもそもは便宜的な理由から「物語の類型」を因子とする選別を行った。しかしながら、物語類型が交差対句の有無や差異に与える影響も、これから確認していくべき項目である。

さらに、今後、樺太アイヌにおける別の口承ジャンルや、異なる口承話者についての調査、北海道アイヌの場合との詳細な比較を進めていく上で、資料としての価値を本稿が有していると筆者は理解している。

参考文献

内山 達也

2006 「樺太アイヌの埋葬形態についての一考察」『物質文化研究』3号: 32-51。

越前谷 博・荒木 健治・桃内 佳雄

2005 「アイヌ語—日本語対訳コーパスを対象とした局所着目型学習による対訳語の自動抽出」『北海学園大学工学部研究報告』32号: 41-63。

大喜多 紀明

2011 「『アイヌ神謡』の修辞パターンから心意を辿る（上）—『交差対句』を糸口として—」『西郊民俗』217号: 24-32。

2012 「アイヌ女性叙事詩『スズメの酒盛り』についての考察—交差対句と心意—」『アジア民族文化研究』11号: 181-213。

大谷 洋一

2003 「松島トミさんの口承文芸 5」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』

9号: 81-116。

影山 太郎

1993 『文法と語形成』、ひつじ書房。

金田一 京助・知里 真志保

1936 『アイヌ語法概説』、岩波書店。

佐藤 知己

2008 『アイヌ語文法の基礎』、大学書林。

田村 すず子

1988a 「二風谷の昔話と歌謡・神謡：民話 1」『アイヌ音声資料』5号: 4-11。

1988b 「二風谷の昔話と歌謡・神謡：民話 4」『アイヌ音声資料』5号: 56-65。

1988c 「二風谷の昔話と歌謡・神謡：民話 5」『アイヌ音声資料』5号: 74-81。

丹菊 逸治

2001 「サハリンアイヌ散文説話の一ジャンル tuytah について —「挿入歌」からみた文字資料—」『少数民族言語資料の記録と保存—カラフトアイヌ語とニヴフ語—』: 69-90。

2011 「〈研究ノート〉あるニヴフ人の戦前と戦後」『和光大学現代人間学部紀要』4号: 129-143。

2012 「サハリン島アイヌ民族の「三人きょうだい譚」の成立仮説：ニヴフ民族の「三人の漁師」からの影響」『口承文藝研究』35号:67-76。

知里 真志保

1948 「樺太アイヌの説話」『民族学研究 12』4号: 328-338。

1973 「生活誌・民族学編」『知里真志保著作集』3号、平凡社。

1981 『アイヌ民譚集』、岩波文庫。

知里 幸恵

1978 『アイヌ神謡集』、岩波文庫。

中川 裕

2001 「自動性・他動性とアイヌ語の動詞」『ユーラシア諸言語の動詞論(1)』: 1-18。

伴野 有市郎

1991 「録音資料 戦後間もない頃録音されたカラフト・アイヌの歌謡：NHK制作の準長時間 SP レコード」『参考書誌研究』39号。

ピウスツキ総合科研 言語・音楽班

1987 「B.ピウスツキ蠟管の録音内容」『国立民族学博物館研究報告』別冊 5号: 207-266。

村崎 恭子

1963 「千島アイヌ語絶滅の報告」『季刊民族学研究 27』4号: 657-661。

1979 『カラフトアイヌ語 文法篇』、国書刊行会。

1998 『樺太アイヌ語：語彙編』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

村崎 恭子（編訳）

作成日 2009-01-07、更新日 2011-10-03、『浅井タケ昔話全集 I, II』（音声・文字資料）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

村崎 恭子（編）

- 2010 「藤山ハル(口述)『樺太アイヌの民話(ウチャシクマ) ウェネネカイペ物語3編』
『AA研北東アジア研究第2巻』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。